

懐中時計

子供からボーナスが出たので、何か欲しいものがあつたら言つてと電話をかけてきた。妻は、

「何を買ってもらおうかな、新しい服も欲しいし、バッグもいいな、靴もくたびれてきているし、欲しいものばかりで困つたな」

困つたなと言いながらルンルン気分である。

「お父さんはなにを買ってもらうの」

私は貧乏性なのか、別に欲しい物はない。会社を定年退職してからは農業一筋、出かけることも少なく、作業服と長靴があれば困る事はない。

「別に欲しいものは無いし、ボーナスが出たといつても知れているやろ。本人も欲しいものがいっぱいあるだろうから、気持ちだけ貰つておくわ。母さんが欲しいものが沢山あるんだつたら、父さんの分も買ってもらつたら」

と言うと、自分だけ買って欲しいと言いくくなると思つたのだろう。

「せっかく何か買ってやると言っているのに、買ってもらつたら。結婚したら家族にかかりきりになるから、いまだけよ」

二週間がたった頃、

「お父さんは何がいいの。早く決めて」と連絡が来た。いつまでも遠慮するのも、大人げないかなと思ひ、

「懐中時計」

と返事した。

私は若い頃から時計を持っていない。仕事は、機械のメンテナンスを行う事が多かったこともあり、修理中に機械にぶついたり、強い磁界で壊すことがあり、仕事中は机に置いておくことが多かった。職場には時計があつたし、始業や休憩にはベルが鳴り時を知らせてくれた。会社を出ても、車には時計があり時間が分からないことはなかった。そんな事からいつしか時計を持たなくなつていた。

しかし農作業をするようになって、お昼がわからない事が時々あつた。正午には、かすかにサイレンが聞こえた。ぶどう作業の忙しい時は、

近くで働く人が多く、軽トラックや単車で一斉に帰宅するので、昼だなど分かつた。しかし自分一人で仕事に集中していると、サイレンが聞こえないことがあつた。腹時計で昼かなと帰ると、一時を過ぎていたり、十一時半頃であつた。

そこで時計を買ってもらふことにした。腕時計は夏場汗をかくことから、懐中時計にした。手作業の多い農作業には、腕時計より懐中時計が良いように思つたし、何か懐中時計は自分の年代にはカッコ良いように思えた。

少しして、小包が届いた。

外箱を開けると、赤い化粧箱が出てきた。やさしい赤色だった。化粧箱の中に、金色の丸いケースが見えた。手に取ると心地よい重さが手に感じられた。吊り下げリングを倒しノブを押す。

「カチ」

という音とともに蓋が下に開いた。

白の文字盤の中にローマ数字で時間表示がしてあり、三時のところに小さい窓があつて、日付が見えた。秒針が音もなく回り静かな時が流れている。

箱の中に、金色のチェーンが入っていた。チェーンを時計に結び、下げると、いっそう懐中時計らしくなつた。チェーンをベルトに結び、時計を前ポケットに入れると、英国紳士になつたような気がした。ポケットから時計を出し蓋を開けた。仕事に楽しみがひとつ増えた。

お礼を葉書で出した。

「金色のケースとチェーン、ローマ数字の文字盤、大変気に入っています。生活に潤いと楽しみができました。農作業でも疲れが出ないように思います。大切に使います。ありがとうございます。体を大切に仕事頑張ってください」

懐中時計の農作業デビューを、いつにするか、何の作業にするか考えた。考える事がうれしかった。はやいデビューが待ちどおしかった。

しかし懐中時計は今、ケースの中で静かに時を刻んでいる。

○九年二月